ノート12:2次形式・行列多項式

1.2 次形式

n変数 x_1, x_2, \ldots, x_n に関する実係数の 2 次同次式

$$Q(x_1, x_2, \dots, x_n) = \sum_{1 \le j \le n} \sum_{1 \le i \le n} a_{i,j} x_i x_j$$
$$a_{i,j} = a_{j,i} \ (1 \le i, j \le n)$$

を x_1, x_2, \ldots, x_n の 2 次形式という.

$$A=(a_{i,j})$$
、 $m{x}=\left(egin{array}{c} x_1 \ x_2 \ dots \ x_n \end{array}
ight)$ とおくと、 2 次形式 $Q(x_1,x_2,\ldots,x_n)$ は次のように表せる.

$$Q(x_1, x_2, \dots, x_n) = Q(\boldsymbol{x}) = {}^{t}\boldsymbol{x}A\boldsymbol{x} = (A\boldsymbol{x}, \boldsymbol{x}) = (\boldsymbol{x}, A\boldsymbol{x})$$

証明:

例 1-1:2 次形式の例

例 1-2:n次の正方行列 P に対して、x = Py とおくと、 $Q(x) = {}^ty({}^tPAP)y$ となる.

注 $1-1: 例 1-2 の {}^tPAP$ は対称行列なので Q(x) は y の 2 次形式とみることができる.

例 1-2 より,次の定理が分かる.

定理 12-1 (教科書 P.126 定理 5.8)

 $Q(\boldsymbol{x})$ を n 変数の 2 次形式とする.このとき,ある直行行列 P が存在して, $\boldsymbol{x} = P\boldsymbol{y}$ とおくと, $Q(P\boldsymbol{y}) = \lambda_1 y_1^2 + \lambda_2 y_2^2 + \dots + \lambda_n y_n^2$ となる.ここで, $\boldsymbol{y} = {}^t(y_1, y_2, \dots, y_n)$ とし, $\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_n$ は A の固有値である.

定理 12-1 の証明:

補足 1-1: $Q(\mathbf{x}) = \lambda_1 x_1^2 + \lambda_2 x_2^2 + \dots + \lambda_n x_n^2$ の形の 2 次形式を標準系という.

例題 1-1:2 次形式 $Q(x_1, x_2, x_3) = 2x_1^2 + 2x_2^2 + 2x_3^2 - 2x_1x_2 + 2x_2x_3 + 2x_3x_1$ の標準系と変換の行列 P を求めよ.

2. 行列多項式

多項式 $f(x) = a_0 x^m + a_1 x^{m-1} + \cdots + a_{m-1} x + a_m$ と正方行列 A に対して,A の行列多項式 f(A) を次のように定義する.

$$f(A) = a_0 A^m + a_1 A^{m-1} + \dots + a_{m-1} A + a_m E$$

次の2つの定理がよく知られている(証明は教科書参照).

定理 12-2 フロベニウスの定理(教科書 P.130 定理 5.10) n 次正方行列 A の固有値を $\lambda_1, \lambda_2, \ldots, \lambda_n$ とするとき,行列多項式 f(A) の固有値は $f(\lambda_1), f(\lambda_2), \ldots, f(\lambda_n)$ である.

定理 12-3 ハミルトン-ケーリーの定理(教科書 P.131 定理 5.11) 正方行列 A の固有多項式 $F_A(\lambda)$ に対して, $F_A(A)=O$ が成り立つ.

例題 2-1: 正方行列 A が $A^2=E$ を満たすとき,A の固有値は ± 1 であることを証明せよ.ただし, $A\neq E, A\neq -E$ とする.(注意:教科書の説明は不十分)

例 2-1:
$$A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$$
 に対して、 $A^2 - (a+d)A + (ad-bc)E = O$.